

日本英文学会関東支部 第16回(2018年度秋季大会) プログラム

日時: 2018年10月27日(土)

会場: 早稲田大学戸山キャンパス

〒162-8644 東京都新宿区戸山1-24-1

アクセス

JR山手線・西武新宿線 高田馬場駅 から徒歩20分

地下鉄東京メトロ東西線 早稲田駅から徒歩3分

副都心線 西早稲田駅から徒歩12分

学バス 高田馬場駅-早大正門、馬場下町バス停

日本英文学会関東支部事務局

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂1-2

研究社英語センタービル

Tel/Fax 03-5261-1922

E-mail: kanto@elsj.org

11:20	開場・受付開始 受付: 36号館3階382教室前、発表者控室: 33号館4階441教室			
11:40 12:00	総会 36号館3階382教室			
研究発表1 12:10 12:50 33号館 4階	第1会場 437教室	第2会場 438教室	第3会場 439教室	第4会場 440教室
	『ハワーズ・エンド』 における弁証法的 和解について (発表者) 政森 志津子 (司 会) 河野 真太郎	ロバート・バートン 『メランコリーの解剖』 における idleness の 諸相に関する一考察 (発表者) 榎原 知樹 (司 会) 五十嵐 博久	チャールズ・ ディケンズの <i>Household Words</i> と 大博覧会 (発表者) 山本 まゆみ (司 会) 中和 彩子	エマソンの家政学 ——エッセイ「愛」、 講義「家庭」に おける空間表象 (発表者) 富塚 亮平 (司 会) 堀内 正規
研究発表2 13:00 13:40 33号館 4階	第1会場 437教室	第2会場 438教室	第3会場 439教室	第4会場 440教室
	マデira島の「いかが わしい商人」—— <i>Jane Eyre</i> における遺産相続 とマデira・ワイン (発表者) 大澤 舞 (司 会) 河野 真太郎	『オセロー』は人種 の悲劇か——オセ ローの悲劇にみる男 性性喪失への恐れ (発表者) 鍛冶 佳穂 (司 会) 五十嵐 博久	エリザベス・コステロ と小説的思考 ——老い、心の傷、 作家の言葉—— (発表者) 金内 亮 (司 会) 小山 太一	発表なし
部門別 シンポジウム 14:00 16:00 36号館 5階	シンポジウム1 (イギリス文学) 581教室		シンポジウム2 (アメリカ文学) 582教室	
	時代と文化のはざまの シェイクスピア (司会・講師) 冬木 ひろみ (講師) 篠崎 実 (講師) 近藤 弘幸 (講師) 小泉 勇人		小説家の詩 (司会・講師) 木内 徹 (講師) 本村 浩二 (講師) 舌津 智之 (講師) 佐藤 直子	
メイン・ シンポジウム 16:15 18:15 36号館 3階	382教室			
	どこへ行く、日本の英語教育——現在を見つめ、未来を考える (司会) 久世 恭子 (講師) 阿部 公彦 (講師) 江利川 春雄 (講師) 笠原 眞樹子 (講師) 福田 恭久			
18:30 20:30	懇親会 ル カフェ レトロ (戸山キャンパス正門前)			

開場・受付開始 (11:20 より 36号館 3階 382教室前にて)

12:10-12:50

【研究発表1】

第1会場 (437教室)

(発表者) 立教大学大学院 政 森 志津子
(司会) 一橋大学准教授 河 野 真太郎

『ハワーズ・エンド』における弁証法的和解について

『ハワーズ・エンド』(*Howards End*, 1910)において、E. M. フォースターは20世紀初頭の英国中産階級に属する三家族、シュレーゲル家、ウィルコックス家、バスト家に焦点を当て、彼らの出会いと衝突を描くことにより、異なる価値観を持つ人々が分かり合えるのかどうかを問うている。そして、社会経済的発展の陰に潜む当時の「英国の状況問題」と呼ばれた社会問題を作品に織り込み、英国の未来に対する提言も行っている。本発表では、小説のエピグラフ“Only connect”が何を意味するのかを念頭に置きつつ、明らかになる価値観の違い、英国の社会問題としての階級対立を越えて、異なる人間同士が付き合い、和解してゆく過程に着目する。そして、最終的な和解の妨げとなるいくつかの障害を排除しながら、フォースターがヘーゲル弁証法的解決策を講じ、物質主義的・功利主義的価値観と、観念的・理想主義的価値観が互いに受容するよう導き、伝統的な英国の田園に囲まれるハワーズ・エンドが継承される過程を検証していく。

第2会場 (438教室)

(発表者) 東京大学大学院 榊 原 知 樹
(司会) 東洋大学教授 五十嵐 博 久

ロバート・バートン『メランコリーの解剖』における idleness の諸相に関する一考察

本発表では Robert Burton (1577-1640) の *The Anatomy of Melancholy* (1621) における idleness の諸相を考察する。まず、idleness をメランコリー(鬱病)の主たる原因とみなすバートンの基本姿勢を、テキスト分析および他の著述家との比較によって確認する。次にそうした姿勢の形成過程を、キリスト教の7つの大罪に含まれる「怠惰」などの宗教的要因や、1590年代の徒弟の反乱に対する英国当局の容赦ない措置などの社会的・政治的要因、さらには、社会階級を横断した怠惰の蔓延が英国の繁栄を阻んでいると感じていたバートンのイギリス観と関連づけて分析する。また、英文学研究において idleness と同義とみなされてきたラテン語の otium 概念にも着目し、バートンは otium の有益性を認識していたものの、それを別の語で表現していたことを指摘する。以上の議論を通じて、idleness の諸相とバートンの執筆動機とが不可分に結びついている様相を明らかにしたい。

第3会場 (439教室)

(発表者) 法政大学大学院 山本 まゆみ
(司会) 法政大学教授 中和 彩子

チャールズ・ディケンズの *Household Words* と大博覧会

Household Words はチャールズ・ディケンズが1850年3月30日から1859年5月28日まで編集した週刊誌で、ヴィクトリア朝の50年代を映し出す鏡のような存在だった。従って1851年の大博覧会もまた射程の中に入っていた。大博覧会はヴィクトリア朝の50年代のさまざまな側面を露呈する催しであった。ディケンズは個人的には大博覧会に対して嫌悪感を抱いていたと指摘する向きがあるが、実は賛美する気持ちも存在していた。ジャーナリストとしてディケンズは *Household Words* でのいくつかの記事により、この催しについて読者に報告した。

本発表では *Household Words* の1851年1月4日の“The Last Words of the Old Year”と1851年7月5日の“The Great Exhibition and the Little One”という二つの記事などを中心として、大博覧会に対するディケンズの屈折した複雑な内面を分析し、さらにそれを生み出したディケンズとヴィクトリア朝との関わりや、1853年の“The Noble Savage”へとつながるディケンズのかかえた根深い要因を明らかにする。

第4会場 (440教室)

(発表者) 慶應義塾大学大学院 冨塚 亮平
(司会) 早稲田大学教授 堀内 正規

エマソンの家政学——エッセイ「愛」、講義「家庭」における空間表象

本発表は、講義“The Heart”(1838)を原型とする、*Essays: First Series*(1841)に収録されたラルフ・ウォルド・エマソンのエッセイ“Love”を貫く「対話」や「距離」の主題を、主に空間表象との関わりに注目しつつ考察する。「対話」が展開される空間としてエマソンが重視した「街路」と「家」、それぞれで育まれる関係性を峻別した上で、彼の議論に残存する男性的な権力への志向を批判したクリストファー・ニューフィールドの議論を批判的に引きつつ、「街路」と「家」、公的で男性的とされる空間と、私的で女性的とされる空間をつなぐ「扉」の両義的な役割を強調したエマソンの戦略を、家政のあり方に言及した講義「家庭」の記述も参照しつつ論じる。流動性と両義性を特徴とするエマソンの友愛観が、ジェンダーと固定的に結びつけて理解されがちな「街路」、そして「家」のイメージとそれぞれどのように関連しあい、あるいは重なりあうのか。この問いに迫る中で、彼の友愛論に新たな光を当ててみたい。

13:00-13:40

【研究発表2】

第1会場 (437教室)

(発表者) 成城大学大学院 大 澤 舞
 (司会) 一橋大学准教授 河 野 真太郎

マデイラ島の「いかがわしい商人」——*Jane Eyre*における遺産相続とマデイラ・ワイン

Charlotte Brontëの*Jane Eyre* (1847) において、ポルトガル領マデイラ島への言及は見落とされがちである。Janeはマデイラ島でワインビジネスに従事していたらしい叔父のJohn Eyreから莫大な遺産を相続する。Janeの伯母のMrs Reedは、彼のことを「いかがわしい商人 (a sneaking tradesman)」と呼んでいた。この遺産相続を通して、Janeが経済的自立や男女平等を達成することはすでに先行研究によって指摘されてきた。しかしJaneが経済的にもジェンダー的にも平等になった上でRochesterとの結婚をするためにはこの遺産が重要だが、なぜそれがイギリスの植民地ではなくポルトガル領のマデイラ島で築かれた資産であり、なぜワイン貿易なのか、という点についてはこれまで注目されてこなかった。本発表では、マデイラ・ワインのグローバルな交易ネットワークを歴史的に明らかにすることによって、*Jane Eyre*における「いかがわしい」イギリス商人の富がJaneとRochesterの結婚にどのような意味をもたらすのかを検討する。

第2会場 (438教室)

(発表者) 早稲田大学大学院 鍛 冶 佳 穂
 (司会) 東洋大学教授 五十嵐 博 久

『オセロー』は人種の悲劇か——オセローの悲劇にみる男性性喪失への恐れ

ウィリアム・シェイクスピア (William Shakespeare) の手になる『オセロー』 (*Othello*) は、主人公であるムーア人オセローが、狡猾な部下イアーゴの奸計に陥り、激しい嫉妬にかられた末に妻デズデモナを殺害してしまう顛末を描いた悲劇である。本作は、近年ではもっぱら人種の悲劇と目されており、先行研究では作中に示される人種差別を中心的な主題として論じられていることが多い。しかしながら、本作の悲劇の最大の要因であるイアーゴの動機とオセローの騙されやすさの背景にあるのは、人種の問題だけではないように思える。本発表では、オセローの悲劇を、16世紀に生じた「男らしさ」の規範の変容との関連という視点から論じることで、その原因を再考したい。

第3会場 (439教室)

(発表者) 東京大学大学院 金内 亮
(司会) 立教大学教授 小山 太一

エリザベス・コステロと小説的思考——老い、心の傷、作家の言葉——

本発表は、J. M. クッツェーの作中人物であるエリザベス・コステロを中心に論じる。作家である彼女は老いていて、病を抱え、心に傷を負った存在として描かれている。このような身体的表象は、彼女の言動にある種の力を付与していると考えられる。しかし、彼女の講演は、それが明らかに彼女の身体性を意識しながら提示されているにも関わらず、作中で聴衆に力を及ぼすことはない。この問題を、クッツェーのその他の作品群も視野に入れながら考察することが本発表の目的となる。結論では、彼女の作家としての言葉がしばしば合理的な言説と対立させられている点に着目する。クッツェーのエリザベス作品は、小説という形式にこそ可能な思考についての考察なのであり、そのような思考の媒体となっているのがエリザベスの身体なのである。

14:00-16:00 (581教室)

【部門別シンポジウム1 (イギリス文学)】

時代と文化のはざまのシェイクスピア

(司会・講師) 早稲田大学教授 冬木 ひろみ
(講師) 千葉大学教授 篠崎 実
(講師) 東京学芸大学教授 近藤 弘幸
(講師) 東京工業大学准教授 小泉 勇人

現在、シェイクスピアの受容は、文化の特異性を前面に出した上演やラディカルなアダプテーションも含め、その多様性にこそ価値を見いだす傾向にあるように見える。シェイクスピアは実際、大衆文化に極めて親和性が高いのも事実であるし、アダプテーションとしてのシェイクスピアが増えてゆくのも納得できる。しかしながら、そうした受容・あるいは現象としてのシェイクスピアと、いわゆるテキスト(キャンオンとしての作品)研究や批評理論とのギャップはますます広がっているのではないだろうか。無論、これがシェイクスピアの現代の姿と言えはそうなのかもしれないが、ここで一旦立ち止まって、受容されたシェイクスピアと机上のシェイクスピアとの乖離を双方の研究者の立場から論議し合う場があってもよいのではないだろうか。本シンポジウムでは、その問題提起の一つとして、時代と文化の中でシェイクスピアの有り様を探ってみたい。

■ アダプテーションとしてのシェイクスピアの創作

篠崎 実

現代における受容とシェイクスピア作品研究とのギャップを埋めるという本シンポジウムの目的を受けて、主に複数テキストの本文比較をもとに、シェイクスピアの創作過程を浮かびあがらせる作業によって、シェイクスピアの創作も材源を劇場での上演のためにアダプトし、さらにそ

れを改訂するというかたちで絶え間ないアダプテーションの連続であったということを示したい。さしあたって、『ロミオとジュリエット』、『十二夜』、『ハムレット』などを扱うことを考えている。『ロミオとジュリエット』で劇作家は、原稿から上演台本完成の過程で、物語上の材源とは別に、オクシモロンを特徴とする恋愛ソネットという素材を舞台アダプトする努力をしている。『十二夜』では、材源の物語を双子の同時の結婚で終わる劇に変えるナルキッソス＝エコー神話を用いている。『ハムレット』では、書き換えという顕著な主題をもつ材源の物語をアダプトして、さらに自身で作品改訂を行ない、その後この作品に加えられる絶え間ないアダプテーションの連続の最初の一步を記した。

■ 採菊散人『三人令嬢』を読む

近藤 弘幸

條野伝平(1832-1902)は、今ではほぼ忘れられた作家であるが、幕末には山々亭有人の号で人情本の作者として人気を博していた。明治新政府が国民の創出・教化の基本方針として1872年に発布した三条教則への戯作者の応答である「著作道書キ上ゲ」を、仮名垣魯文と連名で新政府に提出していることが、この変動期の文壇における彼の地位を物語っている。もっとも彼自身はその後、新聞界に転身し、いったん創作活動から手を引く。1886年に創刊された『やまと新聞』で採菊散人として創作活動を再開した條野は、同紙上にふたつのシェイクスピア物を残している。『三人令嬢』(1890)と題された『リア王』と、『花の深山木』(1891)と題された『オセロー』である。本発表では、この『三人令嬢』を読み解いてみたい。明治の新聞小説において流行した『毒婦物』の系譜、探偵小説の流行、旧幕時代へのノスタルジーなどが、その補助線となるだろう。

■ 多様化するシェイクスピア映画の世界

小泉 勇人

シェイクスピア劇はどのように映像視覚化され、一本の映画として翻案されるのだろうか。例えばここで作家主義の観点を導入するならば、映画監督の作家性はその視覚化の方針に強く影響すると言える。台詞を削除したり保持したりする以上に、映像作家がどのように同時代的な解釈を織り込みシェイクスピア映画を製作しているのかを分析する必要があるだろう。本シンポジウムではシェイクスピア映画の多様性に目を向け、監督の作家性、時代の反映、そして映画史的な位置付けを踏まえつつ、その全貌に迫りたい。『シンバリン』を現代に移し替えた『アナキー』(マイケル・アルメレイダ監督, 2014)、『ヴェニス商人』を部分的に引用した『顔のない天使』(メル・ギブソン監督, 1993)、『オセロー』をモチーフとして読み解く『スター・ウォーズ エピソード3/シスの復讐』(ジョージ・ルーカス監督, 2005)等を取り上げる。

■ ページとステージの相互関係

冬木 ひろみ

シェイクスピアの舞台は演出家と俳優のものであり、テキスト研究・解釈は研究者の専有領域なのであろうか。映画ではあるが、ローレンス・オリヴィエの『ハムレット』はDover Wilson編のCambridge版を色濃く反映している。また、翻訳をテキストの一つの解釈と見た場合、坪内逍遙以来、翻訳者たちは少なくとも上演のためのアダプトされたテキスト作りをしてきている。だが、テキストと上演(あるいは翻訳)が密接に影響し合う状況は実際には非常に少ないし、ペー

ジからステージへという方向はあるにしても、逆は稀である。しかしながら、舞台がテキストの矛盾や人物の微妙な関係性の変化などを逆照射することもあり得る。そこで、現代の舞台とテキストの双方向の影響関係が見られる具体例として、松岡和子訳と蜷川演出の舞台、ロイヤル・シェイクスピア劇団やグローブ座における研究者との連携などを取り上げて、ページとステージの発展的な関係の可能性を再考してみたい。

14:00-16:00 (582教室)

【部門別シンポジウム2 (アメリカ文学)】

小説家の詩

(司会・講師) 元日本大学教授	木内 徹
(講師) 駒澤大学教授	本村 浩二
(講師) 立教大学教授	舌津 智之
(講師) 青山学院大学非常勤講師	佐藤 直子

「小説家」は小説しか書かないのだろうか——いや、そんなことはない。19世紀のアメリカを見てみれば、メルヴィルもポーも小説というジャンルにとらわれず、詩作をも含めた執筆活動を行っていた。19世紀に活躍した「小説家」に限らず、20世紀に入っても詩を書いていた「小説家」は数多い。本シンポジウムでは文学史上は「小説家」と分類される作家が書いた詩に注目し、その作家活動における詩の位置づけ、その作家の小説と詩との関連性、その小説家が書いた詩としての審美性がどこにあるのかなどを考察する。果たして、「小説家」が書く詩を習作や戯れだとして切り捨ててもよいのだろうか。小説と詩には明確な境界線が存在するのだろうか。このような問いに一定の答えを出すべく、主に小説を専門とする四人の研究者がそれぞれの立場から「小説家」の詩を取り上げて、その意義を考える。

■ パストラルの詩人からサザン・パストラルの作家へ

——『緑の大枝』第10篇 → 「丘」 → 「ニンフォレプシー」

本村 浩二

果たしてフォークナーの詩を小説から切り離して論じることに、どれほどの意味があるのだろうか。アンドレ・ブレイクスタンは、1970年代の研究書の中で「フォークナーの初期の著作【詩作品】は、もし後で小説の傑作を書く人のものでなかったとしたら、我々の関心を引くことがほとんどないだろう」と述べている。現在でもこの発言には十分な説得力がある。フォークナーの批評文は、散文との連関で書かれる時に、最も強い効力を発揮するように思われるからだ。

フォークナーは1925年から始まるニューオーリンズ時代を境に詩人から小説家に転じていくと言われているが、彼が主題と表現形式をめぐって詩と小説の境界で模索した期間は、実際のところかなり長い。本発表はその模索の時期に光を当てる。この時期に書かれた3作品——『緑の大枝』第10篇、「丘」、「ニンフォレプシー」——を主にパストラルの観点から取り上げ、彼のジャンル意識を探究することが、本発表の狙いとなる。

■ 女性作家の詩をクィアに読む

舌津 智之

イーディス・ウォートン、ウィラ・キャザー、カーソン・マッカーズという、20世紀前半に頭角を現した大御所と言ってよいアメリカの女性作家3名が、詩というジャンルにおいても作品を活字に残している事実は注目に値する。これら3名をつなぐ補助線として、本発表では、セクシュアリティ表象——とりわけ異性愛規範への抵抗、あるいはレズビアニズムへの接近——に光を投じたい。時間の制約上、それぞれの小説家詩人について、具体的な詩作品1、2編のみを詳しく取り上げる。場合によっては間テクスト的に呼び起こされる他の文学作品にもふれながら、小説との相互作用というよりも、詩そのものが精読に堪えうる強度を有している可能性を探る。語りえぬ欲望を表象するうえで、小説よりも詩というジャンルこそ、言葉の密度や行間の暗示力、そして先行テキストの喚起力において、クィアな主題の探求に適した側面を持っているのではあるまいか。

■ 小説家リチャード・ライト(1908-1960)の詩

木内 徹

ライトはもともと左翼の詩人として出発した。しかし詩人としては大きな成功をおさめることができず、短編小説集『アンクル・トムの子供たち』(1938)、長編小説『アメリカの息子』(1940)、自伝『ブラック・ボーイ』(1945)によってベストセラー作家となった。パリ移住後も長編小説『アウトサイダー』(1953)と『長い夢』(1958)、あるいはアフリカ、スペイン、インドネシアなどの旅行記の出版によって活躍した。しかし死去直前の1959～1960年に日本の俳句に魅せられ、英語で数千の句を作り『俳句——この別世界』(1998)という句集も死後出版されている。ライトは一般的に黒人抗議小説家として知られているが、実は詩人として出発し、詩人として生涯を終えたという事実を見ると、ライトは本質的には詩人だったのかも知れない。この発表ではライトの小説作品と初期詩作品や英語俳句との関連性、ならびにこれらの詩作品と英語俳句そのものの価値がどこにあるかを考察する。

■ 石の言語から偶然の出来事へ——Paul Austerの詩と小説

佐藤 直子

1970年代のPaul Auster (1947-)は、フランス詩の翻訳や文芸評論に携わったかわら、数冊の詩集を独立系出版社から発行していた。しかし、*The New York Trilogy* (1987)で小説家として一躍脚光を浴びて以降、最新作*4321* (2017)に至るまで30冊近くもの小説やエッセイ、自伝的作品を精力的に発表し続けているにも関わらず、1980年代以降のAusterはなぜか詩は一作も発表していない。

Collected Poems (2004)としてまとめられた当時の詩群を紐解くことで浮かび上がるのは、なぜAusterが詩作を断念したのかというよりも、なぜ小説家としては書き続けられたのかという疑問である。「握り拳のような」と彼自身が評するそれらの詩群は、言語によって何かを指示し表現することの不可能性についての詩ばかりなのだ。本発表では、詩人として直面したこの言語的苦悩からその後の小説家としての多産へという変化の過程には、Auster独自の「偶然の哲学」の創出が決定的であったことを考察したい。

16:15-18:15 (382 教室)

【メイン・シンポジウム】

どこへ行く、日本の英語教育——現在を見つめ、未来を考える

(司会) 東洋大学専任講師	久世 恭子
(講師) 東京大学教授	阿部 公彦
(講師) 和歌山大学教授	江利川 春雄
(講師) 東京都立新宿高校英語科主任教諭	笠原 眞樹子
(講師) 東京都立西高校英語科主任教諭	福田 恭久

「戦後最大の改革」とも言われている大学入試への民間試験導入をはじめとして、現在、英語教育においては様々な改革が行われようとしている。この期に、日頃大学などで英語教育に携わっておられる先生方や英語教育にご関心のある方々と、変わりつつある日本の英語教育に対する理解を深め、将来に向けてどう教育に取り組んでいくべきか議論することが本シンポジウムの目的である。講師の先生方には、まず、英語教育・入試のあり方や新学習指導要領の問題点などについてご講義いただく。次に、高等学校で教鞭を執られている先生方に、改革を前にして現場で起こっている賛否の声をお話いただき、また、このような状況下で行われている最新の授業実践についてもご紹介いただく予定である。フロアの皆様にも積極的にご参加いただいて、英語教育の現状についての単なる問題点の指摘や批判に終わらない、建設的な意見交換の場としたいと考えている。

■ 英語教育をダメにする「売り文句」ワースト3

阿部 公彦

日本ほど英語教育をめぐる議論が盛んな国は珍しい。国民の誰もが英語について「俺の一言」「あたしの一言」を持っている。そのわりに多くの人が英語に苦手意識を持ってもいる。実に不思議な現象だ。

日本人と英語のこうしたいびつなかわりに関与しているのは、英語ビジネスの加熱である。英語学習が消費活動に組み込まれ「お金の匂い」がするようになると、政治家が群がり、奇妙な制度が導入される。そこでは、本来地道に、時間をかけ、またおのおのの興味関心とともに行われるべき学習が、不適切な「売り文句」に追い立てられたものとなる。

塾の先生方を含め、ほとんどの英語教育関係者は善意に満ちたすばらしい方々だろう。ただ、英語が消費財となったときに、どうしても私たちが陥る罠がある。今回はこの罠について、「悪しき売り文句」という観点から考察してみたい。

■ 新学習指導要領と英語教育政策の問題点

江利川 春雄

教育政策の基調は、上位1割の「トップを伸ばす戦略的〔グローバル〕人材育成」であり、英語教育はその尖兵とされている。このために、①小学校英語の早期化・教科化、②中高での語彙の大幅増と内容の高度化、③英語による授業の強要、④大学英語入試の民営化により、英語格差を早期化・拡大し、エリート抽出機能を強化する。

私たちは、1)「主体的・対話的で深い学び」を、全員に質の高い学びを保障し、自律学習者＝批判的主権者を育成する「協同学習」に組み替え、2) 小学校英語を国語教育と連携した「ことばの教育」に置き換え、3) エビデンス無き反知性主義的な政策に学理と検証で反論し、4) 小学校英語の教科化と「英語で授業」を指導要領から除外させ、5) 官邸主導の素人による教育政策決定システムを転換させ、6) 政策に無関心な英語教育関係者を覚醒させよう。

技能主義と競争主義を超え、心豊かな人間を育てる外国語教育を追求し続けよう。

■ 新制度入試に向けて——高校の現場から

笠原 眞樹子

このたびの大学入試改革において、英語試験のあり方も大きく変わろうとしている。主たる対象者である2018年度入学生とその保護者が、とりわけ注目度の高い「民間試験導入」についてのどのような意識を持っているのか。そして、高校現場で指導にあたる英語教員たちがこの「民間試験導入」についてどのように受けとめ、考え、今後どのような指針を持ってひとりひとりが目の前にいる生徒たちを導いていこうとしているのか。新制度入試を初めて受ける現高校1年生の担任という立場から、調査で得られた生徒・保護者・同僚の声をもとに議論したい。

■ 高校におけるCLIL実践の可能性

福田 恭久

新学習指導要領では、思考力・判断力・表現力等の育成、4技能5領域とし「話すこと」を「やり取り」と「発表」に分け統合的な言語活動を行うことが明記されている。実際の授業場面で生徒は、教科書の題材について自律的に考え、意味のやり取り (Interaction) を行うことで深い認知的処理を行うことが求められることになる。最近注目され始めているCLILは今回の改訂のポイントに沿った指導法の一つと言える。CLILは学習する内容と言語を統合的に学ぶ機会を学習者に与え、思考力 (Cognition) を育成することを重視する。授業で扱うテーマに関するディスカッションやディベート等の言語活動を通じて、主体的かつ対話的な深い学びを展開していく指導法である。しかしCLILは認知的負荷を伴うため、実際の導入となると課題も多い。西高校での実践を踏まえ、シラバスやタスクの作成、評価、生徒の動機づけとそれを促すための方略等の観点から、高校におけるCLIL実践の可能性について考察する。

懇親会 (18:30-20:30)

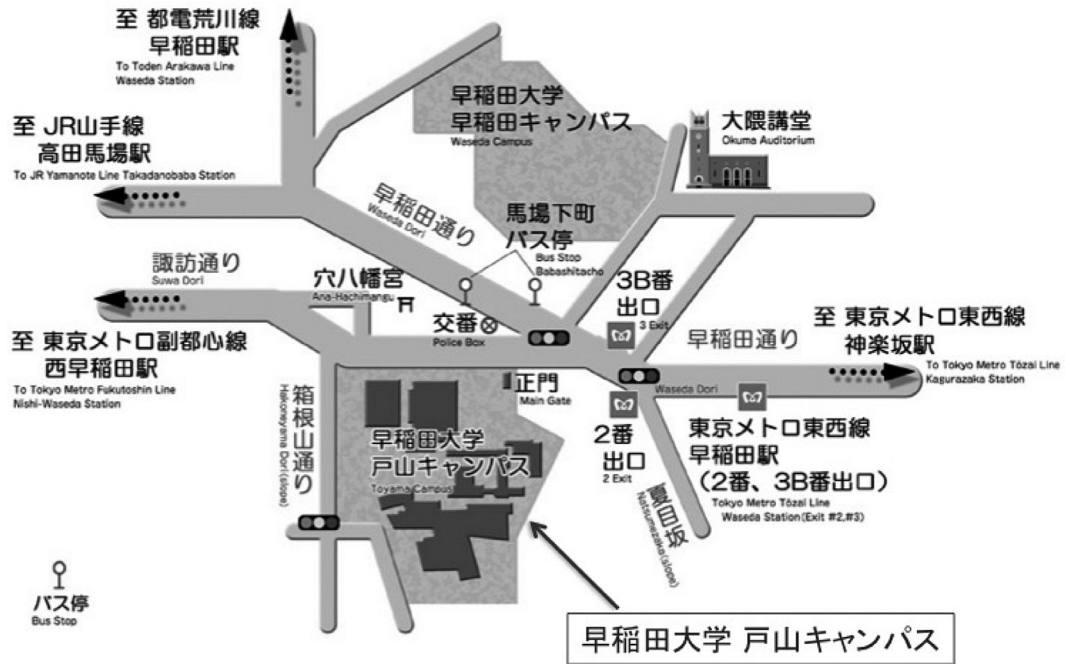
会場

ル カフェ レトロ

会費 4,000円 (学生2,000円)

事前申込は不要です。奮ってご参加ください。

会場アクセスマップ



キャンパスマップ

早稲田大学
戸山キャンパス

